あり

1 （有り・在り）　動ラ変

❶ 存在する・ある・いる
❷ 生きている・無事でいる
❸ その場に居合わせる
❹ 時間が経過する
❺ 栄えている・時めいている

❶ 今は昔、竹取の翁といふ者**あり**けり。（竹取）
今となっては昔のことだが、竹取の翁という者がいた。

❷ 名にし負はば　いざこと問はむ　都鳥　わが思ふ人は**あり**やなしやと（伊勢）→73
（「都」という言葉を）名としてもつのならば、（都の事情に詳しいだろうから）さあものを尋ねよう、都鳥よ。私が恋しく思う人は無事で生きているか、亡くなっているかと。

❸ **ある**人の毛の穴さへ見ゆるほどなり。（竹取）→15
（月が明るいので）その場に居合わせた人の毛の穴まで見えるほどである。

❹ 三日ばかり**あり**て、漕ぎ帰り給ひぬ。（竹取）
三日ほど時間が経過して、漕ぎ帰りなさった。

❺ われ世に**あり**し時は、娘どもをば女御・后とこそ思ひしか。（平家）→11
私が世の中で時めいていた時には、娘たちを女御・后に（立てよう）と思っていた。

「あり」には〈生きる〉や〈栄える〉もの派生的な意味があり、

「あり」は、ラ行変格活用の動詞である。基本は①で、生物・無生物のどちらにも使われ、〈（ものが）ある〉〈（人が）いる〉という意味を表す。この用法は、現代語と同じである。だが、多くの派生的な意味があり、実は手ごわい。

②の〈生きている・無事でいる〉は、〈この世に存在する〉というところから生まれた意味だと考えるとわかりやすいだろう。③は〈その場面にいる〉という意味であるが、うっかりすると「或る人」と誤解しやすいので注意が必要である。「或る人」という場合の「或る」は動詞ではなく、「人」に掛かる連体詞である。⑤の〈栄えている・時めいている〉は、「世にあり」という形で用いられることが多い。

また、「あり」を用いた慣用表現は数多い。

○あらぬ（→350）　○ありし（→201）
○ありつる（→372）　○ありがたし（→121）
○ありありて（＝変わりなくひき続いて・このまま／とどのつまり）
○ありとある（＝ある限りの・すべての）

読み得コラム

◆「とあり」◆　「あり」は、〈と）言う〉〈と）書いてある〉という意味になる場合がある。〈「……」という言葉が存在する〉というところから生まれたもので、多く「とあり」の形で用いられる。また、**「言ふ」「書く」よりも間接的な表現である「とあり」は、敬語表現として用いられることが多く、**〈～とおっしゃる〉〈～とお書きになる〉と訳すことになる。

（殿上人たちが）召して、「ほととぎす待つ歌詠め」**とあり**ければ、詠める。（『古今和歌集』）

訳は、〈お呼びになって、「ほととぎすの鳴き声を待つという題で歌を詠め」**とおっしゃっ**たので、詠んだ〈歌〉〉となる。

◆「あり」の本動詞と補助動詞◆　次の二つの「あり」の違いを考えてみよう。

A 梅の花に**あり**。（梅の花がある・梅の花が存在する）
B 梅の花に**あり**。（梅の花である）

Aは《存在》を表し、Bは《判断》を表すと言えよう。文法的には、Aを「本動詞」、Bを「補助動詞」と呼ぶ。ちなみにBの「あり」の上の「に」は、断定の助動詞「なり」の連用形である。

「あり」の尊敬語にあたる「おはす」「おはします」「います」も、「あり」と同様に本動詞と補助動詞がある。敬語のページであらためて解説する（p209コラム参照）。

◆「あり」のいろいろ◆　傍線部の五つの「あり」の意味を考えてみよう。

昔、男ⓐ**あり**けり。むすめに男あはせたりけるが、失せにければ、また異人に婿とらむとしけるを、むすめ聞きて母に言ひけるやう、「男に具してⓑ**ある**べき未を**ⓒあら**ましかば、ⓓ**あり**つる男ぞⓔ**あら**ましか、さる宿世のなければこそ死ぬらめ」。（『俊頼髄脳』）

ⓐの「あり」は、〈いる（①）〉という意味である。ある男親が〈いた〉が、自分の娘の婿が死んでしまったので、他の男を婿にしようとしたというのである。

後半の娘の言葉は、〈男と連れ添ってⓑ**生きる**はずの運命がⓒ**あっ**たならば、ⓓ**以前の**男はⓔ**生きている**であろうに、そのような運命がなかったので死んだのであろう〉という訳となる。したがって、ⓑとⓔは〈生きる（②）〉、ⓒは〈ある（①）〉という意味である。また、ⓓは「ありつる」で慣用的に使われる表現（→372）。